

## イギリス綿工業の停滞化とインド市場(1880～1913年)

著者	佐々木 隆雄
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	37
号	4
ページ	171-193
発行年	1969-11-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/7523">http://hdl.handle.net/10114/7523</a>

## イギリス綿工業の停滯化とインド市場

一八八〇年—一九一三年

佐々木 隆雄

周知のように一九世紀末のいわゆる大不況期以後のイギリス産業發展の停滯化の一つの局面として綿工業の發展の明瞭な鈍化という事実がある。例えば綿花消費の動向からみると一九世紀前半の發展率はほぼ年率五%であつたのに対して、一九世紀末四半世紀にはそれは一・一%と低下し、一九〇〇年—一九一三年にはやゝ回復したものの年率一・八%であつた。

このような停滯化の原因は極めて複雑であり、イギリス綿工業自身の生産力發展の鈍化とか外国競争の進展とか検討すべき問題は多い。その全体的考察は別の機会にゆだねるとして、ここではとりあえずインド市場との関連においてその原因の一面を明らかにすることとしたい。イギリス綿工業は他国のそれのように基本的には国内向け工業ではなく、世界市場向け生産を中心とするものであり、そのために世界市場の動向に左右されるところが大きかつたが、その中でもとりわけインド市場の地位が大きかつたからである。

表 1 イギリス綿糸布輸出におけるインド市場の地位

年 次	綿 糸 (百万封度)			綿 布 (百万ヤード)		
	イギリスの 輸出総量	インド向け 輸出	%	イギリスの 輸出総量	インド向け 輸出	%
1820	23.0			25.1	14.2	5.7
1830	64.6	4.9	7.6	44.5	56.9	12.8
1840	118.5	16.1	13.6	19.1	14.5	18.3
1850	131.4	21.0	16.0	135.8	31.4	23.1
1860	197.3	30.7	15.6	267.6	82.5	30.8
1870	187.7	31.0	16.5	325.3	92.3	28.4
1886	215.7	47.0	21.8	449.6	181.3	40.3
1880~84	248.9	46.0	18.6	451.6	177.2	39.3
1885~89	251.9	50.3	20.0	483.4	206.8	42.8
1890~94	235.9	46.2	19.5	497.5	210.6	42.3
1895~99	242.2	46.9	19.4	5.141	209.0	40.6
1900~04	162.0	31.8	19.6	5.296	220.3	41.6
1905~09	216.7	38.3	17.8	600.2	240.6	40.0
1910~13	215.2	37.5	17.4	666.5	277.1	41.6

Committee of Industry and Trade, Survey of Textile Industry, 1928, Appendix, pp.148~9 より。1910~13年は Economist, Trade Supplement 各号より。

なお、インド向け輸出は1910~13年の綿糸をのぞきセylon, 海外植民地向けの割合少量の輸出を含む。また1830年以前は支那ジャワ等向けを含む。

今、表1をみれば次の点が明らかである。全体としてのイギリスの輸出は糸では六〇年までの増加が大きく、布ではそれが八〇年まで続き、全体として八〇年までの発展が大きい。八〇年代からは糸はむしろ長期的に緩慢な減少となり、布は九〇年代から二〇世紀のはじめに完全に停滞化したのち再び第一次大戦直前までかなりの回復をみせる。これは先にみたイギリス綿工業の発展テンポとほぼ一致している。このうちのインド向け輸出をみると、ほど八〇年までのインド市場の拡大は相対的絶対的に非常に急速で、特に輸出金額においてはるかに大きなウエイトを占める綿布においてしかりであった。八〇年代からは糸ではシアがやゝおちるが、布ではほどコンスタントに四割余りのシアを占め、この間

インド市場がイギリス綿工業にとって極めて重要な地位を占めていたこと、したがってインド市場の動向をみることでイギリス綿工業の発展動向を検討する上に重要な手がかりを与えることが明らかであろう。

ところでその検討に入る前にインド市場の特徴を一、二指摘しておかねばなるまい。第一はインド市場における第三国の外国競争、すなわちイギリスとインドの工業の競争以外の外国競争は第一次大戦に至るまでごくわずかしかなかったことである。一九一三—四年においてもインドの綿糸輸入のうちイギリス製品は九〇%を占め、綿布では九八%を占めていた。<sup>(1)</sup>したがってここでは第三国の競争は一応捨象しうるのである。これは植民地市場の特殊性によつて強調されたものではあったが、当時のイギリス綿工業の後進資本主義諸国のそれに対する生産力上の優位の一面を示すものである。第二は、インドはアジアの停滞的な後進地域であり、その綿糸布市場の動向はイギリス綿工業が市場面で依存を強めつつあった世界の後進地域の市場動向をみる場合の重要な手がかりともなることである。ともかく、このような特徴を頭において以下簡単に分析することにしよう。<sup>(2)</sup>

(1) F. Uiley, Lancashire and Far East, 1931, pp. 251, 258. 中野忠夫、石田靖二共訳『極東における綿業』昭和十一年三三四、三四七頁。

(2) なお、以下の分析においては短期的な市場動向にはほとんど注意を払わず、もっぱら長期的構造的な問題に視点を限定することを前もってことわっておこう。

先ずほゞ一八八〇年に至るまでのイギリス綿製品のインドへの進出の事情について考察しておこう。

周知のように木綿は元来主として東洋の大衆的衣料であり、イギリス産業革命以前にはインドは中国とともに、いわば特産物としての綿製品の欧米やアジアに対する大輸出国としてあった。したがってイギリス綿工業の発展は、一

面ではイギリスを中心とするヨーロッパの旧来の羊毛中心の衣料体制から綿を主とし在来纖維を従とする衣料体制への転換を果すとともに、東洋に対しては衣料慣習を根本的には変えることなしに、同一生産物の生産力的優位にもとずく在来の手工業の解体をなすことになった。イギリス綿工業は他面では、需要の急速に増大する原料綿花を旧来の中心的生産地たる東洋から入手するというよりは、むしろ別に新開地としてのアメリカ南部への奴隷の植民によって獲得するという形をとり、この面からもインドないし東洋の没落を促進することになった。このような世界的変革によつてはじめてイギリス綿工業はその世界史的意義をもちうることになったのであるが、当面の問題はイギリス機械制綿糸布によるインドの在来手工業の解体作用である。

インドにおける手紡、手織の手工業は極めて広汎に分布し、全体としても農業につぐ最大の「産業」といわれているが、それはほゞ都市手工業と農村手工業とに分類しうる。後者はインドにおいて広汎に栽培される綿花を基礎としてほとんど全国の農村に存在したものであり、農業と密接に結合しながらもかなりはカーストによつて制約された職人によつていとなまれることが多かった。その工業組織はかなり原始的なものであり、村落の必要をまかなうのが中心であつたが、この農村の手織職人が数の上では圧倒的に多数を占めていた。都市手工業はこの農村手工業の上に成立したものであり、その製品は農村の粗布に対して奢侈品や準奢侈品が多く、生産行程における分業も一部では相当進んでおり、一部の製品については地域的分業もみられた。市場はやはり地域的に限られていたが、一部では輸出のほか他地方への搬出もかなりみられた。この都市手工業はインドの土侯や問屋制的な商人の援助や支配によつて発展したが、東印度会社のインド支配の進展によつて一部では土侯や商人に代つて会社の直接間接の支配が進展していったことはいふまでもない。<sup>(1)</sup>

表 2 インド綿製品の対英輸出金額とイギリス  
綿製品の対印輸出金額

(万ポンド)

年 次	インドの輸出	イギリスの輸出
1794/5	228	
1798/9	322	
1804/5	176	
1809/10	118	
1815/16	148	14
1820/21	80	83
1835/26	61	104
1830/31	34	176

I. D. Parshad, Some Aspects of Indian Foreign  
Trade, 1757~1893, 1942, pp. 212, 214.

インド手工業の解体過程もこの都市と農村とでかなりの相異がみられる。都市手工業の解体の一つの局面はしばしば注目されているインド綿製品輸出の急減であった。ヨーロッパの重商主義的な輸入禁止ないし抑制の措置にもかかわらず、インド綿布の西欧への輸出はほど一八世紀末近くまで増加したと考えられ、イギリスへの輸出金額（ヨーロッパへの再輸出を多く含む）も表2のように一八世紀末年約三・二百万ポンドのピークに達するが、以後減少に転じ、一八一五～一八六六年には一・五百万ポンド、一八三〇年代はじめには三〇～四〇万ポンドとなり、この頃にはこの過程

は完了する。この急減の原因は基本的には産業革命による価格関係の変化によるものであり、それまでヨーロッパで最も安価であったインド製品がイギリス機械製品の前に次第にそのコスト上の利点を失ったためである。しかし同時にイギリスが生成期の綿工業のためにとつた著しい保護の強化などの政策も、少なくとも短期的には重要な要因であった。<sup>(2)</sup> いずれにしろこの国際商品流通におけるインド手工業の後退は短期間にほぼ完了するものであった。

それに対して国内向けの都市手工業の解体は輸出の減少とほぼ同じか、むしろより早く始まり、一九世紀中葉に至るよりゆつくりした過程であった。その原因は当初にあつてはイギリス製品の競争というよりも、インドの内乱やそれにつけてこんで推進されるイギリスのインド統治の進展と関連する特殊な要因であった。イギリスのイ

インド植民地化は産業革命とほぼ同時に進展した過程であつたが、それによるインド土侯官廷の漸次的消滅、政治都市の後退は、それまで高級品を中心としていた都市手工業の重要な存立基盤を奪うことになつたからである。そのような事態のもとでは、これまで生産物の質をコントロールしてきたギルドも弱体化していったし、イギリス支配の進展とともに強化されるインド織工やギルドに対するイギリスの圧迫と支配強化も手織工の地位を悪化させた。そのためにかつてヨーロッパから驚威の目をもって眺められていたインド綿製品の質も次第に悪化しつつあつた。

イギリス綿製品のインド国内における競争はこのような状態のもとに一八二〇、三〇年代に本格化することになつたから、その競争の効果は明瞭であつた。既にこの頃にはインド手工業は価格の面では容易にたちうちしえなくなつており、品質の面での利点も以前に比して大きく後退してゐたからである。農村手工業に比して都市手工業が比較的に細物を中心としていたから、この点でもイギリスの競争は直接的であつた。またイギリス政府もこの頃までには明瞭にインドを工業製品の市場、原料供給地として位地づけるべく体系的な帝国主義的政策を打ち出しており、イギリス綿製品の自由貿易の強制、インド製品のみ不利な内国通過税などの障害の当分の間の継続、インド農産物の生産や輸出の促進など、直接間接に手工業解体を政策的に促進しつつあつた。さらに、イギリス支配下に新しく登場した都市階級は、生活の洋風化のためにむしろ当初からイギリス綿製品の消費者として存在したという事情も都市手工業解体の重要な要因であつた。

これらの要因により手工業解体はかなり急速に進展した。もちろん、それも完全に解体されたわけではなく、専門的職人層の一部は一面では生活水準の切下、他面では外国競争の割合少なかった太物や特殊な精巧品の部面で、部分的には輸入糸に依存して手織へ專業化しつつ対応して行くのであつたが、しかし多くの職人は結局は都市浮浪層への

転化、農村への退却などに追いやられ、全体として直接間接に人口の土地圧力の強化という結果をもたらしたのであった。<sup>(3)</sup>

しかしながら、インド手工業の解体のより重要な局面は都市におけるそれではなく、農村におけるそれであつたろう。この過程はもちろんイギリス製品の流入とともに始まつたであろうが、都市と異つて農村の手工業の多くが商品経済との関連をもつていなかったために、インドの広大な農村への商品経済の漸次的滲透というより長期の過程となり、農村の手工業者も専門的なものがかなり多かつたとはいへ多かれ少なかれ農業との原始的結合を保つていたから、それだけ抵抗の大きいものであつた。その本格的展開は、イギリス綿工業の生産力的優位を基礎としながらも、イギリスのインドにおける統治領域の拡大や特に交通革命の進展に支えられて進展するものであり、したがつてむしろ一八五〇年以降のことに属するものと考えられる。ただし、交通革命は単に機械制綿製品を広大な内陸農村にもたらしのみでなく、農民にとつての生産物の商品化、特に重量、容量に比して相対的に割安な一般農産物の商品化を促すことによつて農民の有効需要を創出するものだからである。<sup>(4)</sup>

さて以上のようなイギリス綿製品によるインド手工業の解体が全体としてどの程度進展していったかについては容易に明らかにしないが、ラフではあるが表3にその手がかりが与えられている。これはエリソンの推定を基礎とし、それを世紀の交まで延長したものであり、各年次とも一人当り綿消費量を二・五封度と固定していること、各種の数字がかなりラフなものであることなど、多くの難点があるが、一人当り消費量の固定の問題は停滞的なインドの経済事情を考慮すれば必ずしも重大な誤りにはみちびかないであらう。ともかくこれによれば、この間インドの人口は自然増加とイギリスの植民地支配の拡大によつてかなり大きな増加をみせ、それにつれて綿糸布消費も二倍近くに増加



表 3 インド綿糸布消費の推定

年 次	人 口 (1)	1人当 り消費 (2)	消費全 体 (3)	イギリス からの輸 入 (4)	インドの国産(国内向)		
					総 量 (5)	機械紡績糸 ⑥	手紡糸 (7)
	(百万人)	(封度)	(百万封度)	(百万封度)	(百万封度)	(百万封度)	(百万封度)
1831~35	150	2.5	375 (100)	144 (4)	362 (96)	—	362 (96)
1856~60	182	2.5	455 (100)	160 (35)	295 (65)	?	295 (65)
1880~81	240	2.5	600 (100)	350 (58)	250 (42)	95 (16)	155 (26)
1891	290	2.5	738 (100)	430 (59)	295 (41)	200 (29)	95 (13)
1901	295	2.5	838 (100)	445 (60)	293 (40)	250 (34)	43 (6)

1880~81年以前の(1)~(5)は T. Ellison, The Cotton Trade of Great Britain, 1968, p. 63 より。

1891年以後は(1)は後の表 5, (4)はほぼ当該年度の貿易統計 (但し綿布はほぼ 5 ヤード = 1 ポンドとして換算した) (6) は正確な数字が入りしえなかったもので大体の見当による。

全体として(3)=(2)×(1), (5)=(3)-(4), (7)=(5)-(6) として算出した。

おカッコ内の数字は%である。

しているが、その間インドの手紡Ⅱ手織がかなり急速に減少している。他方イギリス製品のシェアはほぼ八〇年頃まで急上昇し、世界最大の綿消費国の一つであるインドの消費のほど六割を占めるに至っている。またイギリス製品の輸入は綿布が中心であったから(表 4 参照)それによる工業の解体の多くは手紡、手織の両行程に対するものであり、その点においてその後手工業解体作用においてむしろ中心的役割を果たすインド機械紡績業の作用とは異なり、いわば全面的な解体作用をなすものであったことも明らかである。

このような作用をなしたイギリス綿製品の輸入をインドの輸入貿易全体との関連で見ると表 4 のとおりである。綿製品のシェアは南北戦争による綿花飢饉時の低下はあるものの一八八〇年までほど五割を占めつづけている。この面でもインドにとって在来手工業の解体がいかに大きな意味をもっていたかが明らかであり、インドにおける貿易発展がインド「工業」の喪失によって支えられていたこと、さ

表 4 インドの綿製品の輸入額

(百万ルピー, %)

	商 輸 入 品 類	綿 糸	綿 布	合 計
1851	116	10.4 ( 9.0)	36.4 (34.5)	46.8 (40.5)
55	127	12.7 (10.0)	54.0 (42.4)	66.8 (52.4)
60	243	20.5 ( 8.4)	96.5 (39.8)	117.0 (48.2)
65	282	21.9 ( 7.8)	110.4 (39.2)	132.3 (46.9)
70	329	27.2 ( 8.3)	135.6 (41.2)	162.7 (49.4)
75	362	31.6 ( 8.7)	163.6 (44.9)	194.2 (53.7)
80	412	27.5 ( 6.7)	169.2 (41.1)	196.6 (47.7)
85	557	33.6 ( 6.0)	212.0 (38.1)	245.6 (44.0)
90	692	34.8 ( 5.0)	263.9 (38.1)	298.7 (43.1)
95	735	28.5 ( 3.9)	298.2 (40.6)	326.7 (44.5)
1900	753	24.5 ( 3.3)	270.0 (35.9)	294.5 (39.2)

R. Dutt, The Economic History of India in the Victorian Age, 1956, pp. 160, 161, 345, 529, 530 より。

らにイギリスのインド支配において綿工業が決定的意味をもつていたことが明瞭であろう。

以上、イギリス綿製品の一八八〇年頃までの流入の事情はほぼ明らかであろう。それは全体としてのインド人の綿消費の拡大によるよりは、むしろ基本的には旧来の手紡Ⅱ手織の手工業の解体によるものであり、基本的には産業革命によるイギリスとインドとの綿製品の価格関係の完全な逆転とその後におけるインド内外の鉄道その他による交通革命の進展に支えられたものであった。更にそれを促進したものとしては、イギリスのインド統治領域の拡大、鉄道建設を含めてのイギリスの体系的な帝国主義的政策——イギリス綿工業の利害によって推進され、インドの農業国化を目的とされた——の推進、イギリスのインド植民地化に伴う政治的社会的変化の諸影響であった。

(一) 以上については次の文献を参照された。D. R. Gadgil, The Industrial Evolution of India in Recent Times, 1933, chap. III, 21. 鈴木正四訳『近世インド産業発達史』昭和十八年第三章第十二章 M. P. Gandhi, The Indian Cotton Textile Industry, Its Past, Present and Future, 1930,

chap. II—IV, 西村孝夫著『インド木綿工業史』一九六六年第二章第四章。

- (2) これらの点については Gandhi, op. cit., chap. V, Parshad, op. cit., p. 83 ff. 西村孝夫著、前掲書第四章第五章を参照。なお、一八世紀末から一八二四年ないしその後しばらくの間はイギリスの綿工業の育成と関連し保護主義の強化がみられ、捺染綿布の輸出に対する補助金制度の採用や、インド色物木綿の輸入禁止の継続とともに、インド中国の白地木綿の関税の著しい引上(例えば白地キャラコの関税は一七九七年の約一八%から一八一三年の約八五%まで引上げられた)があった。一八四〇年のイギリス議会の委員会における次の証言は興味あるものである。「四半世紀の間我々はインド領土に対してわれわれの製品を受けとるよう強制し、羊毛製品の関税はなく、綿製品の関税は二・五%にすぎなかった。他方我々は我々の領土の生産物商品に対してひきつづきほとんど禁止的な関税すなわち一〇%から二〇、三〇、五〇、五〇〇、更には一〇〇〇%の関税をかけてきた。したがってその間に生れたインドとの間の自由貿易の主張は我国にとっての自由貿易であり、インドとの国との間の自由貿易では決してなかった。」(Gandhi, op. cit., pp. 42—5) 産業革命期のイギリスの保護政策は、もはやかつての羊毛工業保護政策でもなく、また後の自由貿易でもなく、インドに対しては一方的な自由貿易の強制を伴う幼稚産業の保護育成政策であった。

- (3) 都市手工業の解とその要因については主に Gadgil, op. cit., chap. III 鈴木訳、第三章、Gandhi, op. cit., chap. V を参照。都市手工業の解体の著名な一例は「インドのマンチェスター」といわれたダッカである。ダッカはその高級なモスリンでヨーロッパでもよく知られていたが、一七八七年頃に手工業のピークをむかえ、一七九三年より衰退していく。かつて十万人に達した人口も一八四〇年頃には三〜四万人に減少し、既に廃墟に近かった。ダッカ市場では同じ頃三〇〜二〇〇番手の糸はイギリスの独占に帰しつくり存続しえたわずかの手工業者は、三〇番手以下の太物の生産に集中していたという (Dutt, op. cit., p. 105, A. S. Parse, The Cotton Industry of India, 1930, p. 21)。なお、インドの都市人口の比重は一九世紀はじめ七〇年間に低下したことはまちがいない。それ以後第一次大戦まで九%前後を維持しつつ、ほとんど上昇していない (Gadgil op. cit., pp. 158—60. 鈴木訳、二〇三—二〇六頁)。

- (4) 以上にふくまは Gadgil, op. cit., chap. I, XI 鈴木訳、第一章第十二章が割合にくわしい。また交通革命と商品経済特に

貿易の発展との関連については Parshad op. cit., p. 155 ff. を参照。なおインド農村の商品経済化の進展においては、インド政府が旧来の土侯から受けついだ地租の金納化も重要な役割を果たしたことも付言しておく。

さて、以上の考察から本稿の課題である一八八〇年代からのイギリス綿製品のインド向け輸出の停滞化の一面もほゞ明らかにしうるであろう。先ず第一にあげなくてはならないのは、これまでの手工業の解体の結果として解体さるべきインド手工業の範囲の減少であろう。なるほど、一八八〇年においてもインドの消費のうちでイギリス綿製品以外のシェアはなお四割を占めており、さらに手紡リ手織もなお三割近くを占めていたが、しかしこの点に関しては次の二点を考慮しなくてはなるまい。一つはインド農村の広大さであり、大規模な鉄道建設によってもそれを全面的に商品経済にまきこむことは容易なことではない。ランカシャーは八〇年代においてはまだインドの鉄道建設に対する大きな関心を持っており、それが失われるのは一九世紀末のことであったが、それにしても鉄道建設のもたらす綿製品市場拡大の効果は、重要な鉄道の建設完了とともにかなり減少しつつあったであろう。より重要なもう一つの論点は、ヨーロッパとの衣料慣習の相違や生産力の質の問題などと関連して、イギリス綿工業による手工業の解体は一定限度以上には容易に進展しえないことであろう。特に農村においては、労働条件、生活条件の都市との相違のために、価格面では不利であっても、耐久性などの点から極太の手紡糸ないし手織布への一定の依存は容易にたちきりえなかったであろう。実際にイギリス綿製品は極太糸ないしその織物、一部の精巧品においては終止手工業生産物を容易に駆逐しえず、先にもふれたようにこの部門がインド手工業の存続部門とみなされていた。これらの点を考慮するとき、一八八〇年頃にはイギリス綿工業の分解作用が限界に近ずきつつあったという見解は決して不当なものではなからう。

者 5 インドの人口 (百万人)

年 次	センサス による人 口 (1)	同増加 (2)	増 加 の 内 訳		修正後の 人口増加 (5)	修正後の 人 口 (5)
			新地域 によるもの (3)	追加統計の改良 によるもの (4)		
1850						205
1872	206.2					265.1
1881	253.9	47.7	33.0	12.0	2.7	267.8
1891	287.3	33.4	5.7	3.5	24.2	292.0
1901	294.4	7.1	2.7	0.2	4.2	296.2
1911	315.2	20.8	1.8	—	19.0	315.2

A. M. Carr-Saunders, World Population, Past Growth and Present Trends, 1964, p. 269.

なお、(5)=(2)-(3)-(4)、(6)は1911年は(1)に等しく、それ以前は(5)の増加人口数を1911年の(6)の数字から差引いたものである。したがって、(6)は1911年と同じ領域における人口を示すものである。

また、1860年の(6)はラフな推定である (ibid, p. 37 より)。

このことは次のように云いかえてもよい。すなわち、これまでのイギリス綿製品の流入はインド人口の絶対的増加と一応無関係に増加しえたのに対して、今やそれはこの要因と無関係ではなくなつた、と。インドの人口の世界人口に占めるシェアはこの時代にはほぼ一定で、一八五〇年、一九一一年いずれも約十八%であつたが、その増加は表5の示すとおりである。七〇年代末と九〇年代後半の深刻な飢饉の影響がこの表から読みとれるが、七〇年代には植民地領域の拡大による人口増加と手工業に対するかなり急速な分解作用の継続とによって、イギリス綿製品の流入は短期的にはともかく長期的には打撃が少なかった。それに対して九〇年代の人口増加の停滞とイギリス綿工業の停滞との関係は明瞭であつた。この間を通してインド農民の所得にはかなり大きな増加があつたとは考えられず、特にいわゆる大不況期においては農業国は相対的に不利な世界価格関係におかれていたから、一層しかりであろう。こうしてイギリス綿工業にとつてのインド市場は、部分的には植民地拡大のペーシの問題はあつたが、主としては手工業解体自身の限度と人民の所得水準の停滞のために、インド人口の自然増加——それも農民の生

活水準の低さによってまた飢饉によって制約されていたが——に制約されざるをえないという限界に直面しつつあったといつてよからう。

もちろんこれは一面では植民地支配の結果でもあり、矛盾でもあった。イギリスのインド統治は、工業の解体ないし発展の抑制によって、また旧来の土侯から受けついだ重税やその金納化の圧力によって、インド農業の生産力の上昇を結果的に抑制することにより、またしばしば飢饉を激化することにより、結果的にインド市場の拡大を抑制していたからであった。植民地支配が直接的、短期的視点に立つて推進されざるをえない限り、このような事態は必然であつたからである。

ところで、この時期にはインドの機械制綿工業の発展によるイギリスとの競争激化という事態が生じ、これがイギリス製品の輸入を抑制したもう一つの要因であつたことも忘れてはならない。もつとも、この点を余り一面的に強調することはできず、今のべた第一の点を前提としてその上で一定の評価を与えるべき要因であらう。そこでその点について簡単に述べておこう。

インドの機械制綿工業は一八五四年から始まり、当初からかなりの発展があるが、六〇年代には綿花飢饉によって発展はかなり中断され、その本格的発展はむしろ六〇年代末からとみてよく、以後九〇年代ははじめまでの第一期、九〇年代の停滞ののち第一次大戦までの第二期に二分される。当面对象たる第一期<sup>(1)</sup>には表6のようにその発展はめざましく、七八年、八三年をのぞけば毎年中断のない拡大をつづけ、イギリス綿工業の異常な恐怖感をひきおこすのに充分であつた。工業立地は綿花その他の大貿易港ボンベイを中心とするが、かなりの内陸への立地のシフトも始つていた。工業発展の方向は紡績業を中心とするものであり、工場制織布の発展もみられないわけではなかつたが、しか

表 6 インド機械制綿工業の発展

年 次	工場数 (1)	紡 錘 数 (2) (千錠)	力織機数 (3) (千台)	(2)/(3) (4)	労働者数 (5) (千人)	綿花消費 (6) (百万封度)
1854	1	30	—		0.5	
1869	17	393	4.6	85	2	(30)
1880	56	1,462	13.5	108	44	121
1885	87	2,146	16.5	130	67	234
1890	137	3,274	23.4	140	103	395
1895	148	3,810	35.3	108	139	526
1900	193	4,946	40.1	123	161	570
1905	197	5,163	50.1	103	195	737
1910	263	6,196	82.7	75	234	758
1913	272	6,597	94.1	70	254	822

1869年以前は S. D. Mehta, the Cotton Mills of India, 1854~1954, 1954, p. .

1880年以後は A. S. Pearse, op. cit., p. 22 より。

し紡績に比してはわずかにすぎず(表6における紡錘とか織機の比率や後の表7の一九世紀末の数字を参照)、企業形態も紡績専業工場の発展がむしろ中心であった。紡績糸の市場は、ほゞ三、四割を吸収する輸出(主に中国向けである)とともに国内の手織業者向けが多かった。その発展はこれまで解体されながらなおかなり広汎に存続していた国内の手紡Ⅱ手織に対して、手紡を解体させることを通じて手織を再編せしめる結果をもたらした。手紡は広大なインドにおいても一九世紀末にはほゞ消滅したと考えられるし、<sup>(5)</sup>これまで手紡の立地——それは当然ながら広汎に分布する綿作地帯に立地することが多かったが——にかなり制約され、局地的市場や一部は村落共同体の非商品経済的分業に依存していた旧来の手織に対して、一面でその原料面からの立地の制約を変化せしめることを通じて、他面では原料コストを引下げることを通じて、分散的立地構造のうちにもその地域的集中をあていど促し、市場範囲を拡大し、問屋制的商人の仲介機能を強化させつつ再編制することとなったのであり、<sup>(6)</sup>したがって手織に対してはかえってその量的拡大を

もたらしたものと思われる。

紡績業自身については、資本は主にインド人に依存し、原料はほとんどインド綿花を用い、技術的にはイギリス人技術者への依存のためにイギリス綿工業の影響が大きかったが、八〇年代中期からの急速なリング紡錘の普及にみられるようにイギリスとは異なる技術的パターンが形成されることにもなった。一般労働力の面では一部の都市労働力依存はあるが、主に農村のいわば出稼労働者という不安定な供給源に依存しており、労働力の質の悪さ、非定着性、かなり慢性的な労働力不足などの難問に悩まされつづけた。最後に製品たる紡績糸では漸次より細糸の増加はみられたものの、一八九五年でも生産の九〇%が二〇番手以上のものであり、当時の西欧的基準からすれば圧倒的に極太糸生産への集中がみられた。

このようなインド綿工業の急速な発展の要因としては、構造的には原料、市場への近接という立地条件が重要であり、歴史的には内外の交通革命による商品経済の促進や輸入機械、燃料の低廉化、七三年から九〇年代中期の銀の金に対する価格低下による東洋の銀本位国の西欧の金本位国に対する相対的有利さなどが指摘しうる。また同時にアメリカ南北戦争時の綿花飢饉の影響として六〇年代にインド綿花の輸出量、輸出額の急膨脹とその後の反動が生じ、それがボンベイその他地域にとっていわば資本の原始的蓄積の作用を果し、その後の企業の技術、熟練の蓄積のスタートを準備したことも、この時期の綿工業成立の重要な契機となった。<sup>(?)</sup>

インド綿工業発展のイギリスへの打撃については、この時期イギリス側から異常な関心が払われ、しばしば異常に強調されていた。ランカシャーは母国と植民地との間の競争条件の完全な平等を求めて、以前のようにインドを一般的に自由貿易地域として維持するといふにとどまらず、単なる財政目的のための低関税さえもそれを保護主義的とみ



なして廃止させ、インド財政政策への干渉の一層の強化を行うのであるが、それもこのインド綿工業に対する恐怖感に由来するものだった。しかしわれわれはインドの競争圧力をランカシャーの綿工場主とともに不当に強調してはならずそれに対する妥当な評価を与えなくてはならない。

先ず、両者の直接的な競争関係は必ずしも大きなものとはいえなかった。先にも述べたように、インドの製品があくまでも粗糸中心であり、イギリス綿工業がインドにおいて充分果さなかった極太糸の手紡の駆逐という機能が中心であり、イギリス製品との競争範囲はかなり部分的なものとどまった。たしかにイギリス糸の輸入は一八八〇年には二〇番手で阻止的な影響を受け、八〇年代末には二四番手でも同様となり、糸輸入全体としても八八年に約五四百万封度のピークをむかえたのちやゝ減少傾向を示し、またイギリス糸の中国への輸出も八五年ピーク約二〇百万封度のピーク後インドの競争のために急減している。<sup>(9)</sup>しかし元来、イギリスは極太物の輸出には余り積極的ではなかったと思われるし、布では代替は一層少なかったとみられる。<sup>(10)</sup>全体としても先の表3や後の表7の一九世紀末の数字の示すように、インド綿糸布消費に占めるイギリス製品のシェアは少なくとも一九世紀末まではエリソンの一八八〇—八一年の推定数字よりもむしろ大きくなっているのである。

より大きな影響はあったとすれば、むしろ潜在的なものであろう。イギリスはおそらく、これまでのインド市場の急速な拡大という条件の下で相対的に下級品への充分な考慮を払っていなかったと思われるが、リング紡等の技術発展によりその方向での発展の展望がおそらく開けつつあったろう。しかしインドの紡績業の発展はそういう発展方向を阻止する作用をなし、リング紡機の不採用というイギリス綿工業のパターンを決定づける重要な要因になったと思われる。したがってインドの発展が潜在的にはイギリス綿工業にとってかなり重大な脅威であったことはおそらく否

定できまい。

以上、一九世紀末のイギリス綿製品市場としてのインドの拡大の停滞化は、基本的にはインドにおける手工業の解体が限界に達しつつあったという事情と、これまでイギリスが競争上不利であったとみられる下級品でのインド機械制紡績業—手織業の発展との二因に帰しうるのであり、それが「農業不況」という国際的環境によってある程度激化されたものと結論しよいであろう。

(1) A. Redford, *Manchester Merchants and Foreign Trade*, vol. II, 1850-1939, pp. 33-4.

(2) 手織に比して生産力格差の割合少ない機械製の布の面ではもちろんのこと、手紡に比してその格差が大きかったと思われる機械制紡績系においても、イギリス綿工業が容易に分解しえない部分がかなり存在したのであるが、その理由は充分には明らかにしえなかった。おそらくそれは極太物におけるコスト格差の相対的少なさ、特にその耐久性などの質の差を考慮した上での価格差の相対的少なさによるものであろうし、また西洋の基準から考えてインドの太物が余りに異なった製品であるため、イギリスがその生産、販売に充分な努力を払わなかったという、いわば文明の差異にもとづく要因もあったかも知れない。それはともかく、このようなイギリス綿工業の限界は中国市場においてははるかに重大であり、そこではイギリス製品の使用は終止開港場等の都市階級に限られており、農民は価格は高くとも耐久性などですぐれていた土布への選好を強くもっていたといわれる。そしてインドの機械制紡績系がここにおいても土紡糸の部分的駆逐という形でイギリスのなしえなかったことを部分的になしとげることになるのである。このようなイギリス綿工業の伝統的綿消費国たる東洋に対する働らきかけの限界と、インドその他の東洋の機械制綿工業の発展によるその限界の打破は、イギリス綿工業の性格理解の上でも見逃しえない一つの問題点であと考えられる。なお中国の綿製品市場の性格については、小山正明「清末中国における外国綿製品の流入」近代中国研究委員会編『近代中国研究』第四輯所収がくわしい。

(3) 註インドの飢饉は単に自然的災害とはいえないものであり、事実一九世紀末には飢饉による死亡者数は顕著に増加した。それはイギリス支配下における商品経済化の一つの結果でもあった。例えばダットによれば、インド支配が東印度会社から

直轄統治に転換して以来インドからイギリスに流れる「富の流出」が増加したが、この一部はインドの穀物輸出の増加によって支えられた。交通革命の進展によるインド穀物の世界市場への包摂は、結果的には圧倒的に農民の負担に帰するインド財政収入のイギリスへの送金を支える一つの手段になったのであり、そのために飢饉にそなえての伝統的な穀物貯蔵の慣習が破壊され、飢饉に対する抵抗力が減少せざるをえなくなったからである。Dutt, op. cit., pp. 348-9.

- (4) この時期のインド綿工業の発展については特に註を付さない限りは、主として S. D. Mehta, *The Cotton Mills of India*, chap. II-V, K. Gandhi, op. cit., VI, VIII, 249-250, 251-252 を参照。

- (5) E. Helm, "An International Survey of the Cotton Industry", *Quarterly Journal of Economics*, 1902-03, vol. 17, p. 431. なおガンジーは手紡米を手織用糸消費の「割増」とみている。Gandhi, op. cit., p. 85, N. B.

- (6) 手織業の発展の問題については充分な研究はないが、特に S. D. Mehta, *The Indian Cotton Industry*, *An Economic Analysis*, 1953, pp. 95-6, 104 ff. を参照。

- (7) なおインドの構造的な利点として労働コストの低さの問題は少なくともこの時期には重要とはいえなかった。一八八八年のマンチェスター商工会議所の調査によると、ボンベイの工場は低賃銀と長時間労働にもかかわらず、労働力の質の悪さや設備の差などのため、二〇番手シニール糸でも労働コストはイギリスに比して高価だった。これらのイギリスとインドとの比較については S. J. Chapman, *Works and Wages*, Pt. I, *Foreign Competition*, pp. 150-2, Redford, op. cit., pp. 36-8 を参照。

- (8) インド綿工業発展によるインドの関税政策の変化については、例えば次の文献を参照されたい。Dutt, op. cit., Mehta, *The Cotton Mills of India*, chap. IV, VI,

なお、この時代の重要な関税の変更は、一八八二年の綿糸布関税の全廃、一八九四年の(1)綿布全部および二〇番手以上の綿糸に対する五%の関税の設定、(2)インド紡績工場において生産される二〇番手以上の綿糸に対する五%の相殺的消費税の設定、一八九六年の(1)綿糸の関税、消費税の全廃、(2)綿布関税の三・五%への引下げとインド工場の生産する綿布に対する三・五%の相殺的消費税の設定であった。またイギリス綿工業はその外にインドに対する工場法の強制という形でもイン

ド綿工業發展に干渉を加えた。

(9) イギリスの各国向け綿糸布輸出統計は Economist, Trade Supplement 各号による。

(10) なお、一八九四年頃インドの財政委員会のメンバーたるウェストランドは、イギリス製品のインドとの競争についての調査の結果次の結論に到達した。(1)インドの綿製品の九四％は、マンチエスターがインドほど安価に供給しえない粗製品(二番手以下)であり、マンチエスターの競争の範囲外にあること、(2)マンチエスターの取引の大半は大体三〇番手ぐらいの織物であり、糸ではやや細番手であること、(3)二六番手以上の製品についてはインドは競争上不利で、困難なしには生産しえないこと、の三点である。ここにも両者の競争関係の実態が示されている。Gandhi, op. cit., p. 64.

二〇世紀に入るとイギリス綿工業もインド市場もともにある程度の回復をみることになるのは先にも述べたところであるが、この点が本稿の最後の問題となる。

まずインド綿工業の發展からみておけば、一八九〇年代中末期にはそれはかなり重大な事態に直面する。一つは通貨問題であり、九三年のルピー銀貨の自由鑄造の停止、九八年のルピーの切上を伴う金為替本位制の採用により、短期的なショックとより長期的な銀本位国なるが故の競争上の利点の喪失があった。第二は九四、九六年の関税改革であり、その審議過程での未決定状態を含めて、それは短期的にかなり攪乱的影響を及ぼした。第三は日本の綿糸布の中国への進出とインドとの競争激化であった。第四はくりかえされるインドの大飢饉とボンベイその他のペストの流行による綿工業労働力の確保の困難であった。このうち第二、第四は直接的には一時的要因であり、第一の要因は世紀末の銀価低落の停止により長期的には必ずしも重要とならず、二〇世紀に及ぶ要因としては第四による労賃水準の上昇と特に第三の東洋諸国間における競争激化であった。

二〇世紀に入ってからインド綿工業發展の特徴は、これまでむしろ中心的であった紡績部門の發展鈍化と織布部

表 7 インドにおける綿糸布の生産と消費

## A. 綿 糸 (百万封度, %)

年 次	生 産 (1)	輸 出 (2)	国内向け 生 産 (1)-(2) (3)	輸 入 (4)	国内消費 (3)+(4) (5)	工 場 の 費 (6)	手 織 の 費 (7)	その他の 消 費 (8)
1896/7 ~1898/9	464 (136)	173	291 (86)	49 (14)	340 (100)	82 (24)	249 (73)	9 (3)
1906/6 ~1908/9	650 (146)	245	405 (91)	39 (9)	444 (100)	162 (36)	268 (60)	14 (3)
1912/3	688 (134)	215	473 (92)	41 (8)	514 (100)	254 (49)	260 (51)	

## B. 綿 布 (百万ヤード, %, (8)項のみヤード)

年 次	工 場 の 生 産 (1)	輸 出 (2)	国内向け 工場生産 (1)-(2) (3)	手 織 の 生 産 (4)	国内向け 国 産 布 (3)+(4) (5)	輸 入 (6)	国内消費 (5)+(6) (7)	1人当り 消 費 (8)
1896/7 ~1898/9	393 (12)	98	295 (9)	996 (31)	1,291 (40)	1,911 (60)	3,202 (100)	11.0
1902/3	524 (16)	109	415 (12)	960 (29)	1,375 (41)	1,986 (59)	3,361 (100)	11.3
1907/8	808 (19)	112	696 (17)	1,108 (26)	1,804 (43)	2,401 (57)	4,205 (100)	13.7
1912/3	1,220 (24)	125	1,095 (22)	1,040 (20)	2,135 (43)	2,847 (57)	4,983 (100)	15.8

綿糸の1896/7~98/9年, 1906/7~08/9年は Mehta, The Indian Cotton Industry, pp. 89, 90, 123, 1912/3年は村山高著『世界綿業発達史』1961年445頁, Gandhi, op. cit., p. 84より。綿布の1896/7~98/9年は Mehta, ibid., pp. 127-8, 1902/3年以降は村山著 同書 344頁より。

表 8 1913-14 年のインドの綿糸輸入と生産  
(百万封度, %)

番 手 数	生 産	輸 入	合 計
1~20	492.7 (72.0)	1.2 (2.7)	493.9 (68.0)
21~30	166.0 (23.0)	4.6 (10.4)	170.6 (23.0)
31~40	19.7 (2.9)	23.6 (53.0)	43.3 (6.0)
46~	2.7 (0.4)	7.8 (18.0)	10.5 (1.4)
合 計	682.8 (100)	44.2 (100)	727.0 (100)

Utley, op. cit., p. 283. 中野. 石田共訳, 前掲書, 383-4 頁。

門への工場の進出であり、その結果としての兼業工場の比重の顕著な上昇であった。紡糸生産量は一九〇二年の五七三百万封度から一九二一三年の六八八百万封度へと約二〇%の増加にとどまっており、工場の布生産量はこの間表7のように二倍以上にふえている。この紡績部門の発展鈍化は、一つは二〇世紀初頭以来の綿糸輸出の減少によるものであり、これはボンベイが以前にもついていた東洋における先進性の利点——労働の熟練と効率における利点——を失うとともに、日本や支那の二交代労働制や異なる原料基盤などの利点にたちうちしえなかったことを示す。また

他方国内市場においては、既に一九世紀末に手紡の解体をほゞ終えていた以上、その拡大はイギリス製品との競争拡大や「細糸」への進出という困難を伴わざるをえなかった。この間「細糸」への進出はある程度進み、大戦直前には表8のように三〇番手以上も多少生産されるに至っているし、また糸の段階での輸入の排除も三〇—四〇番手でもかなり進んでおり、それによって糸輸出の減少をカヴァーして余りある国内消費増大をとにかくも実現しえた。

しかしそれにもかかわらず、綿布の形で外国製品の排除は決して容易ではなかった。先の表7のように、インド綿工場は紡績部門の停滞を織布部門の拡大によってカヴァーし、国内向けの工場制布生産は一九世紀末以来三倍余に拡大しているが、その多くは手織業（インド機械制紡績糸を主たる原料とする）の相対的低下によるものであり、イギリス綿製品ポイコットを唱えるスワデシ運動の展開にもかかわらず、また国産布と輸入布との競争範囲がこの間ひきつづき拡大していったにも

かわらず、イギリス綿布のシェアの低下はわずかにすぎなかった。そして、そのことによって紡績業を含むインド綿工業の発展がもう一つの制約を受けることになったのである。<sup>(2)</sup>

このような国産糸―布生産の限界ないし製品の高級化の困難は、一つには主原料たるインド綿花の質が悪く、高級品や細物の生産に不適當であつたこと、また一つにはイギリス布が既に長年の間インド人の相対的に高級な布への需要を満たしつづけてきた結果として、都市のみでなく田舎においても「高級布」におけるイギリス製品への選好が強く確立されており、それにくいこむことが容易でなかったこと、また一つには労働力の質や生産技術の点からインド布の多くはイギリス布の仕上りに比して劣つていたであらうこと、によるものである。それはともかく、ここにイギリスの競争力の強さとインド工業のくいこみの困難さがうかがえるのであり、競争範囲の拡大にもかかわらず、イギリス布のインド消費におけるシェアはかなりよく維持されることになったのである。

ところで、この時期のインドの綿布消費の動向について注目すべき点は、先の表7のように一人当りの消費量がこの間かなり大きく増加していることであらう。<sup>(3)</sup> 以前について同じ推定がないので確かなことはいえないし、またこの間大飢饉による消費減少からの回復や、多少とも残されていた手紡Ⅱ手織（それはこの表には含まれていない）の減少があつたであらうし、また一九一二―三年はブーム的状况もみられたから、その点も考慮しなければならぬが、それにしてもこの増加は停滞的インドにしてはかなり大きいといえよう。他方先の表5のように、大飢饉が少なかつたことも関連してこの間の人口増加はかなり大きかつた。以上の両者あいまって、インドの綿布消費量はかなり大きな増加を示し、それがインド綿工業の競争激化を緩和し、イギリス布輸入の拡大をもたらしたとみてよいであらう。また一人当り消費の増加は、一般大衆の所得増加を伴つた限り、多少とも需要の「高級化」をもたらし、イギ

リスに有利な影響をもたらしたかも知れない。そして、この一人当り消費増加はおそらくこの時期の世界的な農産物の値上りによる農産ないし農産国の交易条件の好転と無関係ではなかったと思われる。

以上、イギリス及びインドの機械制綿工業の手紡の駆逐後におけるイギリスの綿製品の対インド輸出はもはやどうてい昔日の如き発展をみることはできなかったが、この時期には一方でのインド製品の「高級化」の困難とイギリス綿工業の「高級品」における伝統的ないし生産力的優位により、インド工業によるイギリス製品排除の進行が少なかったために、他方ではインド農産ないし農産物にとつての有利な国際的環境や自然条件の存在により、インド綿布市場全体の拡大がかなり大きかったために、あるいは換言すれば、競争範囲の拡大によって生じるインド工業のイギリス製品排除が多少とも進行したにもかかわらず、後者の市場拡大によってそれが充分に相殺されたために、イギリス綿製品のインド向け輸出は一九世紀末の停滞をあるていど克服することができたのである。そして、これを一つの主要な原因として、イギリス綿工業も平時としては最後のブーム期を迎えることができたといつてよいであろう。

(1) 以下のインド綿工業の発展についても主に Mehta, *The Cotton Mills of India*, chap. VI による。

(2) なお表7の綿布の統計を綿糸ベース(百万封度単位)に換算して、先の表3と同様の仕方では糸布全体の輸入と国産との比較をすれば、一九世紀末で輸入が消費の六〇%、一九二一三年で五六%となり、全体としてもこの間のイギリス製品の後退はわずかなものにすぎなかったことが判る。

(3) なお、註2に述べたような換算の結果によると、表7の一人当りの綿布消費量は、一九世紀末で二・三封度弱、一九〇二—三年で二・三封度強、一九〇七—八年で二・八封度、一九一三年で三・二封度となる。これは先の表3と対比しうる数字であるが、本文にのべる毎年の特殊事情を考慮するとき、一八八〇年頃の先のエリソンの仮定(一人当り二・五封度)も決して不当なものではないことが判らう。